

無 明 の 煉 獄

—Keats の Scotch Tour と *Inferno* の暗示するもの—

松 浦 暢

Or is it that Imagination brought
Beyond its proper bound, yet still confined, —
Lost in a sort of *Purgatory blind*,
Cannot refer to any standard of law
Of either earth or heaven? — It is a flaw
In happiness to see beyond our bourn.

—*An Epistle Verse to Reynolds*, 78—83—

作家が或る作品を読む場合、単なる偶然を起えた必然的契機、内在的欲求に由る場合がある。キイツがダンテ (Dante Alighieri) の *Divina Commedia* —特に *Inferno* に触れたのは、正しくそうした一例であった。1818年3月といえはキイツは、“*Purgatory blind*”「無明の煉獄」で言い表わされる深刻な精神的危機に瀕していた。華麗な詩劇 *Endymion* 脱稿後の Keats は徐々に『感覚から思索へ』の道を辿り始めていた。そうした彼に、世の悲惨、苦悶が観念的なものとしてでなく苛酷な現実として襲いかかった。

それは静かな夕昏れだった。

巖々は声なく——広漠たる蒼海は白銀の波のしぶきの、涯てしない襲を、褐色の起伏なき砂浜にそって織っていた。わたくしの心は平和だった。そう、もっとも平和であるはずだったのだ。——しかし、そのとき、わたくしは見たのだ、あまりにも深く、大海の底を。そこでは、すべての胃袋が大きなものが、小さいものを、永却に喰べている。わたくしは、はっきりと覗き見た、永遠の恐ろしい殺戮の内奥を。そこで、わたくしの平和は遠くけしとび、まだ、わたくしの心は傷ついている。註(1)

ここには、*Endymion*, Book III『海底の巻』に見られる青春の多感、過ぎし日を歎く pathos はない。冷厳な詩人の眼は、海底で行われる弱肉強食の戦慄すべき現実を直視している。そこには現実との安易な妥協を拒否し、ありのままの現実を掴えて事物の真髓に肉迫しようとする態度が窺われる。Keats が、同期の

他の浪漫詩人と区別されるべき点は、この態度にあり、Douglas Bush の指摘するように、“poetic integrity”「詩の真実」を真摯に求め、徒らに現実を逸脱した“self-expression”に墮することがなかったからである註(2)。しかし、かかる Reality の把握は、当然、“the agonies, the strife of human hearts”註(3)をもたらし、23才の詩人に苦悩を与えた。この苦悩は、さらに自分の詩的能力に対する深い懷疑と絶望により憂愁の翳を加えたのである。少年の夢に描いた、大詩人になる憧憬の軌跡は、蔽いかぶさる苦悩の前に薄れて行った。

今、私は死というものがあることを悦ばずにはいられません。あの偉大な人間的な目的のために死ぬという光栄を、究極の光栄とせずにはいられないのです。恐らく、今の私の状態が、現状とちがっているのだったら、こんなことは書かなかったでしょう。私には二人の弟があります。一人は「社会の重荷」で、アメリカへ、一人は生命に対する深い愛着を持ちつつ、死の床にあるのです。……それに私には妹があるので、弟についてアメリカへ行くことも、墓へついて行くこともかきません。人生は耐えしのばねばなりません。そして死ぬ前に、もう一、二篇の詩を書くという希みで自らを慰めています註(4)。

この陰鬱な Bailey 宛の手紙は、この時期の人間キイツと、詩人キイツの相剋する内面の悩みをよく伝えている。一家の長男であるという責任から経済的手段を放棄し、他の兄弟を犠牲にしてまで、作詩に専念するわけにゆかず、又死にゆく弟 Tom の看病も思うに委せず、愛する弟 George 夫妻との永遠の別離も、ただ待つばかりである哀れなる詩人。そうした彼には、さらに自作 *Endymion* に対する痛烈なる酷評まで待ち受けていた。

“amiable, but infatuated bardling, mister John Keats”

—Edinburgh Magazine, May 1818—

「愛すべき、ノボセ上ったヘボ詩人、ジョン・キイツ氏」註(5)

かかる非情な運命の流れに、手を拱いているより、致し方のない自らの非力に、Keats が死を希んだとて不思議はなかった。同じ Romanticist とはいえ、Byron, Shelley に比し、Keats の環境はあまりにも貧しく悲惨であった。窮乏の日々を強靱に生き抜いてきた魂にとって、Leigh Hunt 等の Cockney School の一味であるという単なる理由で、不当に批評され、葬られんとした若い詩人の胸中は悲壮であった。

こうした苛酷な実人生に由来する悲観的メランコリアと、自己の詩的能力に対する深い懷疑に懊悩するキイツにとって、暗黒の地獄に救済の光を求めて歩む Dante の『神曲』の *Hell* は、詩人の心に共通し、その共感をよぶ一つの精神の

場であったと考えられる。その意味で、キイツが、死と直面して人間存在の中核に触れ、魂の救済を求めるという永遠の、普遍的課題を得たのは、疑もなく *Vision of Dante* からであった。また、それと並び、キイツがダンテに学んだのはその『神曲』の奏でる壮大な叙事詩的世界構図であり、全篇に漲る鮮烈な詩的イメージとその造形美、高く飛翔する幻想、不思議な中世的感觉と驚異の音楽美であった。とりわけ、暗く凄惨な情景の展開する *Inferno* は、中に鏤められた美しく悲しい幾つかの episodes を秘めて、キイツの心を激しく捉えた。キイツは深い洞察力と共感をもって、この『地獄篇』を Scotch tour (June 22, 1818—Aug. 18, 1818) 中に耽読したのである。

この旅行に携行したダンテの『神曲』は、

The Vision; or Hell, Purgatory, and Paradise of DANTE ALIGHIERI

Translated by The Rev. Henry Francis Cary, A. M. (London)^{註(6)}

と題される3巻の小型袖珍本で、Keats の詩集を出してくれたロンドンの John Taylor 書店の刊本であった。Keats の読んだものは、1814年版であり、この辺の事情は、Robert Gittings: *The Mask of John Keats* (Heinemann)^{註(7)}に精しい。しかし Cary が『神曲』を完訳した日付につき、“In 1814, Cary had completed his translation of the whole of the *Divine Comedy*.” (p. 7) と述べているのは、どうであろう。偶然に私の入手した1831版にある Cary 自らの第一版の Preface には、*Hell* は、1805年と1806年に原文対照で発表し、*Purgatory* と *Paradise* の訳出は、1797年頃に始められ、1812年の夏になって完訳したとなっている^{註(8)}。Gittingsの考証のミスは明かである。

さて、キイツは、この Cary 訳のダンテを、それが、Knapsack の“aptest corner”にでも入るという便利さも手伝って携行し、7月22日、アメリカに永住する弟 George 夫妻を見送って、湖畔地方を振り出しに Scotch Tour に出発している。

この旅は、“to make a sort of Prologue to the life I intend to pursue—that is, to write, to study and to see all Europe at the lowest expence.”^{註(9)}の目的の下に企てられたものであったが、天候には必ずしも恵まれず、風雨に晒され、霧に包まれ、岌々たる岩山に阻まれ、砂塵にまかれ、その上、陰湿な気候のため、キイツは、やがて宿命の“sore throat”に悩み、弟と同じ死出の旅につく運命を荷った。

この肉体上の故障は、詩人の内心に潜んでいた既述の深刻な苦悶と重なり、この旅行中に書いた短詩の性格を比較的暗いものにしてしまった。憂愁の美漂う冷たい北国、Scotland の自然形象は、愛読した『地獄篇』の <infernal images> と交錯融合し不思議な harmony——死と地獄と暗黒の複合 images を醸成している。この時期に相前後する詩の随所に、従って、このような similes や met-

THE
VISION;
OR
HELL, PURGATORY, AND PARADISE,
OF
DANTE ALIGHIERI.
TRANSLATED BY
THE REV. HENRY FRANCIS CARY, A.M.
THE THIRD EDITION.
WITH THE LIFE OF DANTE, NOTES, AND AN INDEX.
IN THREE VOLUMES.
VOL. I.
LONDON:
PRINTED FOR JOHN TAYLOR,
BOOKSELLER AND PUBLISHER TO THE UNIVERSITY OF LONDON,
30, UPPER GOWER STREET.
MDCCLXXXI.

1831年版 Cary 訳「神曲」の title-page (現寸大) (筆者蔵)

aphors が頻出したとしても当然であった。

'Tis young Leander toiling to his *death*
Nigh swooning, he doth pursue his weary lips
For Hero's cheek, and smiles against her smile.

(*On a Picture of Leander*, 6—8)

……for thou art *dead* asleep.
Thy life is but *dead* eternities.

(*To Ailsa Rock*, 9—10)

No god, no demon of severe response,
Deigns to reply from Heaven or from *Hell*?

(*Why did I Laugh Tonight?* 2—3)

I saw pale kings and princes too,
Pale warriors, *death-pale* were they all;
They cried—'La Belle Dame sans Merci
Hath thee in thrall!

(*La Belle Dame sans Merci*, St. X)

こうした、“death”, “hell”, “darkness” のような *infernal imagery* の散見されるところから、もっと *Hell* の影響を決定的なものとする具体的な資料のあることが予測される。この prospect を充たすキイツの sonnets を三つばかり順を追って紹介してみよう。

「人間の感覚の眼を鋭く研ぎすまして北極星の状態にし、永遠の暁を開き、大自然の驚異を観察する」註(10) という *Scotch Tour* の150日目ほどで、Keats は *Dumfries* に到着、この旅、初の sonnet を書いた。それは Robert Burns の墓を訪れ、その悲惨な死を悼み、綴られている。On *Visiting the Tomb of Burns* と題するこのソネットに附した説明で、「バーンズの墓は教会の一隅にあったが、私の趣味に合わない。……このソネットは夢幻のような不思議な気分で書いた。なぜか判らないが、雲も空も家も、総べて反ギリシャ的、反シャルマーニッシュに見えて致し方なかった。」註(11) と述べている。“strange mood, half asleep” は、同詩の “Though beautiful, cold—strange—as in a dream, I dreamed long ago” と表現されている〈夢〉である。では、この〈夢〉は、一体何であろう。そこにはダンテの地獄の ‘vision’ の allusion があるのではないか。この詩が Burns の墓を訪れた時、その悲惨な運命を偲んで作られた詩であることを想起するとよい。

「彼の悲惨は、鷲ペンの進行に死の重みを与える。その悲惨を忘れようとし、苦患

を離れて Toddy を呑もうとした。そして陽気なソネットを書こうとしたが徒労だった。彼は悪魔と話し、悪漢と酒杯をあげた。悲惨な男だったのだ。」註(12)

キイツは、Burns の悲惨な運命を、*Hell* の第二圏にあって、Minos の裁きを受けている “Carnal sinner” の運命に見立てていると思われる。

All is cold Beauty; pain is never done:
For who has mind to relish, *Minos-wise*,
The Real of Beauty, free from that dead hue
Sickly imagination and sick pride
Cast wan upon it!

(*On Visiting the Tomb of Burns*, 8—12)

「すべては、冷たい美だ。苦悩はさらない。
というのも、誰か、病める想像、病める詩の
青白く投げかけた、あの死の色を取りのぞき
まことの美を、ミノスのごとく味う人があろうか。」

—『バーンズの奥津城を訪ねて』—

この条は、Gittings の指摘を受けるまでもなく、*Hell*, Canto V に有名な Minos の image に負っている。

There *Minos* stands
Grinning with ghastly feature: he, of all
Who enter, strict examining the crimes,
Gives sentence, and dismisses them beneath,
According as he foldeth him around.

(Dante: *The Vision of Hell*, Canto V, 4—8)

「そこに、ミノスは立ち、恐ろしき形相にて
唸りつつ、入りくる者の罪を糺し、
刑をさだめ、自らの体を尾をもて巻き
下の環に彼等を送り出しぬ。」

—『地獄篇』第五歌—

キイツの “Minos-wise” に示された内包の意味は、「冷静な思索」、つまり初期のキイツに欠けていた人生の深い叡智であった。

「私は何も知らない。何も読んでいない。＜智慧を得よ、洞察力を得よ＞というソロモンの教に従いたい。私には騎士道時代は去ったのだ。私には、不断の智

慧の吸収以外に、この人世に喜びはないと思う。」と、友人の Taylor に洩らすとき註(13)、また “sensation with Knowledge” <智慧を伴った直覚> の重要性を説いて

「広汎な智慧は思索家には必要だ。それはのぼせ上った熱気を静めてくれる。そして思索の拡大により、神秘の重荷を軽減する。……智慧を伴った直覚と伴わない直覚の差異こんな風だ——あとの場合は、留るところなく一万尋も落下し、今度吹きあげられた時は、翼もなく、肩はむき出しの凄惨恐怖に襲われる人間となる。前の場合は、我々の両肩には翼が生え、同じ空間を楽々と飛翔する。」註(14)

と述べる時、詩人には Minos の冷徹な叡智が賦与されていると思われる。“sensation without Knowledge” は、“detached, dreamy, flight” で “aimless, empty soaring” を招き、“sensation with knowledge” は、“the height and depths of life” 註(15)への意義ある飛翔であり、judge Minos の意図する “objective neutrality” 註(16)の適確な把握であった。

キイツのスコットランド旅行の目的の一つが、“strengthen more my reach in Poetry” 註(17) <自己の詩の領域をもっと拡げるため>であることを考えれば、これは一つの重要な精神的収獲であった。

このソネットを書いて、2週間後、キイツは、英国最高峰の山 Ben Nevis に登頂、*Written upon Ben Nevis* を書いた。この詩には、“chasm” <深淵>、“a shroud vaporous” <霧の屍衣>、“Craggy stones” <峨々たる懸崖> とかいった自然の elements の諸形象が蝟集している。これはダンテの *Hell* の Canto II から Canto VIII にかけて、ダンテの経験する色々の elements —— 風、雨、霰、雪、泥、水の影響と見られる。これに、キイツが、旅行中に実際に体験した同様の自然の elements の影響が重なったものであろう。

キイツが、ベン・ネヴィス山頂から俯瞰した「霧の屍衣」の蔽った深淵 <chasm> <abyss> や、突兀たる巖の聳え立つ荒寥とした風景は、*Hell* の第四歌にある “dread abyss” 「恐しい深潭」や、“Lamentable Vale” 「歎きの谷」から見下した凄絶な情景に負うところが多い。

For certain, on the brink
I found me of the lamentable vale,
The dread abyss, that joins a thund'rous sound
Of plaints innumerable. Dark and deep,
And thick with clouds o'erspread, mine eye in vain
Explor'd its bottom, nor could aught discern.

(Dante: *Hell*, Canto IV, 6—11)

「まこと、限りなき号泣の
とどろく恐しき深淵^{よち}なす
歎きの谷の際に、われは来ぬ。暗く深く
霧たちこめれば、谷底は朦朧として
何物も定かならざりき。」

—『地獄篇・第四歌』6—11行—

Read me a lesson, Muse, and speak it loud
Upon the top of Nevis, blind in mist;
I look into *the chasms*, and *a shroud*
Vaporous doth hide them,—just so much I wist
Mankind do know of hell;
.....
..... ; mist is spread
Before the earth beneath me,—even such
Even so vague is man's sight of himself!
Here are *the craggy stones* beneath my feet,
Thus much I know that, a poor witless elf,
I tread on them,—that all my eyes doth meet
Is *mist and crag*, not only on this height,
But in the world of thought and mental might!
(Written upon Ben Nevis, 1—14)

「おお、ミューズの神よ、われに教え給え
霧たちこめるベン ネヴィスの頂にて。
われ深淵をのぞけども、霧の屍衣のため
何事も定かならざりき。人の子の地獄の知識も
およそ、かばかりならん。.....
見よ 霧はひろがりぬ、はろか地上に。
人の己れを見る力も、およそ、かく朧ろなり、
下には峨々たる、きりぎしは聳えぬ、
われ知るべきは、無智なるわれの
ただ巖の上を歩めるのみ、わが見るすべては、
この高みのみならず思索と精神^{こころ}の世界でも、
ただ、霧と巖ばかり。」

—『ベン ネヴィス山頂の歌』—

この懷疑と苦渋に満ちたソネットは、絶望を詠っているのではない。むしろ得
体の知れない懷疑の霧を破り、苦渋の巖を砕き、その外に出ようとする精神的努

力を示している。たちこめる無明の霧は、キイツの旅で見た Helvellyn の霧であったのか、聳える絶望の懸崖は Ambleside の ‘a jut of rock’ なのか、物凄い chasm は、Lowdore の滝の “a cleft in perpendicular Rocks” であったのか、それは定かではない。拭い難い真実は、全詩を蔽っている懷疑と苦悩である。漠々たる霧と巖の間を歩いて行くキイツの姿には、生の十字架を背負い冥界を下って行くダンテの姿、その悩める精神的彷徨の影を宿しているようである。いみじくもキイツは、この詩を書いた頃、心情を弟にこう吐露している。

「苦悩を出ては、何の偉大さ、何の威厳も存在しない。現実を最も逸脱した快楽には何の永続的至福もない——これは真実である。」

—1818年7月3～9日、トーマス・キイツ宛書翰より—

ここで、キイツは一度も ‘death’ の語を使用していないが、その背後には、<死> の great shadow が生と隣接する不気味なる存在として潜んでいる。Ben Nevis の寂として声なき山頂に立つ詩人は、換言すれば世界空間に投げ出された一個の渺たる人間の姿にしか過ぎない。死は深い霧の姿となり、恐しい巖の姿となり詩人を囲繞する。考えて見れば、人間世界には何の不滅のものもない。死は生の continuum として、卑小なる詩人を嘲ける如く犇々と押し包む。身をめぐる一家の不幸、詩人となる希望も、今は仰ぎ見る巖の壁の前に薄れてゆく。読みふけた Dante: *Inferno* の sensory images は、冷たく異和的な Ben Nevis の自然形象と重なり、すぐれた視覚形象を、この詩の中で結んでいる。

こうした、さまざまな *Inferno* の、キイツに及ぼした影響の中で、もっとも美しく哀切な余韻を残しているのは、*On a Dream* (1819) と題する sonnet である。<感覚と思考>の見事な融合がここにある。

So on a Delphic reed, my idle spright,
So played, so charm'd, so conquer'd, so bereft
And seeing it asleep, so fled away.
Not to pure Ida with its snow-cold skies,
Nor unto Tempe, where Jove grieved a day;
But to that second circle of sad Hell,
Where in the gust, the whirlwind, and the flaw
Of rain and hail-stones, lovers need not tell
Their sorrows, - pale were the sweet lips I saw
Pale were the lips I kiss'd, and the fair the form
I floated with, about that melancholy storm.

(*On a Dream*, 3-14)

「わが心、ものうく、デルフォイの葦笛を吹き
 竜を魅了し、その眼を奪い、眠れるを見て逃げさりぬ
 雪の寒空いただく、かの清らのアイダの山でなく
 ひと日、ジオヴの神、悼みしテムペの都にあらず
 かのダンテが悲しき地獄の第二圏に。
 烈風、旋風、雨、霞の疾風^{つむじ}にうたれ
 恋人のかたみに悲しむよしもなき第二圏に。
 わが見しひとの美しき唇は蒼ざめ
 わが接吻けし唇も血の気なく、ともに
 愁しき嵐のさなか、漂いし、君の姿
 あはれにも美しかりき。」—『夢』—

このソネットを transcribe した George 夫妻への手紙には、次のような説明が添えられている。

「ダンテの第五歌は、ますます私の好みに適っています。それは、ダンテがパオロとフランチェスカに邂逅する条です。幾日も私は、スランプ気味でしたが、そのうちに、あの地獄界にいる夢を見たのです。その夢は、今までにない楽しい夢でした。ダンテの本にあるように、私は地獄の業風のさなかを吹き飛ばされていました。美しい女と一緒に、その人と私は長い間、接吻け合っていたようです。そこで冷たい暗闇の中でも寒くありませんでした。花咲く樹の上に吹き上げられ、しばらくは、その梢にいましたが、やがて次の風に運び去られたのです。その夢をソネットにしてみました。あゝ、あんな夢だったら毎晩でも見たいものです。」註(18)

この素直な解説から判明するように、このソネットは、*Hell* (Canto V) の影響の結晶で、キイツは、暗い地獄の業風に掠鳥の群きながら、運ばれる “Carnal sinners” “肉欲の罪人” —— パオロとフランチェスカの姿に感動し、夢にまで見て発想したのである。

キイツのソネットに見られる gust <烈風>, whirlwind <旋風> の images は

Bellowing there groan'd
 A noise, as of a sea in the tempest torn
 By warring winds. The stormy blast of hell
 With restless fury drives the spirits on,
 Whirl'd round and dash'd amain with sore annoy.
 (Hell, Canto V, 30—34)

「戦いどむ旋風に引きさかれ

嵐の海のごとく咆えうなる声はしぬ。
地獄の業風は、たえまなく怒り、
罪人を吹き飛ばしふり廻し
力の限り、なげ打ちて喜びぬ。」

—『第五歌』30—34行—

The starlings on their wings are borne abroad;
So bears the tyrannous *gust* those evil souls.

(*Hell*, Canto V, 42—43)

「空に浮かびし棕鳥の、いやはるか
運ばるること、非情なる旋風は悪しき魂を運びゆきぬ。」

—『第五歌』42—43行—

の二例の passages に借りている。次いで “flaw of rain” 「雨まじりの疾風」と “hail” <霰> の形象は、

Large hails, discolour'd water, sleety flaw
Through the dun midnight air stream'd down amain:
Stank all the land whereon that tempest fell.

(*Hell*, Canto IVI 9—11)

「大粒の霰、黒ずめる水、みぞれまじりの疾風は、
真夜中の闇空より激しく降り注ぎ
嵐おそえる大地に悪臭を放ちぬ。」

—『第六歌』9—11行—

の凄愴な陰府の motor imagery に由来している。さらに、キイツの夢に漂った <fair form> は、Paolo と Francesca の名高い一節に見られる。

Love, that in gentle heart is quickly learnt,
Entangled him by that fair form, from me
Ta'en in such cruel sort, as grieves me still:
Love, that denial takes from none belov'd,
Caught me with pleasing him so passing well,
That, as thou seest, he yet deserts me not
Love brought us to one death.

(*Hell*, Canto V, 99—105)

「やさしき心を疾くとらえる恋は、
美しきかの人をとらえ、非情にもわれより奪いぬ。
その悲しさ、いまでも忘れず、
はげしき愛は、きみ見るごとく
いまでもなお、わが身を離さざる強き愛着を
かの人に与え、われを捉えぬ。
かくて恋は、われらを一つの死に導きぬ。」

—『第五歌』99—105行—

キイツにあって<死>は、最も比重の重い思想の一つであり、終生この苦悩の詩人には、<死>との対決が課題となった。キイツにあっては、*Ode to a Nightingale* でもそうであったように<死>は現世と対照的にあるものではなく、苦悩の世の連続として、<生>と隣接するものとして存在した。“easeful death”の一見 oxymoron 的な表現も、詩人が現実を逃避することなく、その苦患に身を沈め、自我の意識を滅却し、死を快よく迎え入れる態度から生れたものであった。いわば、Wasserman の説く「真実の生に生きるため、彼は死を希求したのである。」^{註(19)}

こうした詩人の耳に、死者の国から、風のささやき——いや、哀号にのって流れ寄る声がある。それは哀切をきわめた恋人達の、怨みと歎きの声であった。生前に果たせなかった二人の愛は、いま地獄の業風の中で一つに合し、死の境にして生の境を流れて行く。考えてみれば、生の世界にも永劫不懐の immortality はなく、世の常の恋も瞬時にして死と連なる。それは生・死の過程にある一つの変転の相に過ぎず、青春は忽ちにして白髪の老年に移り、この世の孤独なる人間のもっとも懂れる恋の一刻も、生・死の世界にまたがる仇し事に過ぎない。しかし儚ないがために、たまゆらの愛は、美しく、その悲劇性は、暗黒の冥府の中で、さらに強調される。

なおも語り続ける、Francesca の言葉、

No greater grief than to remember days
Of joy, when mis'ry is at hand.

(*Ibid.*, 118—119)

「悲しみのさなかにありて、喜びの日を
語るほど、世に悲しきはなし」

—『第五歌』118—119行—

の哀婉悲壮の条は、生・死の鋭い対照により、その悲しみの色を濃くしている。この二行は、既述のキイツの詩の “Lovers need not tell/Their sorrows” の

名句を生む因となった。この辺のキイツの *Hell* 愛読は、歴然たるものがあり、“Pale were the lips I kissed” の一行は、その「血の気の失せた唇」のイメージを “the hue/Fled from our alter’d cheek” (*Hell*, Canto V, 127-128)「われらの頬より血の気は失せぬ」から借用したわけだが、興味あることに、キイツの初稿では、ダンテ同様 “cheeks” としてあったが、再稿の際、鉛筆で “lips” に rewrite している註(20)。この “lips” の用語は、ダンテの作品に更に用例があり、…“at once my lips / All trembled kiss’d. / We read no more.” となっている。

こうした相次ぐ、視覚、聴覚、動的形象の重複と、キイツ自身の言葉から、*On a Dream*における、ダンテの *Hell* の第五歌、第六歌の影響は疑う余地はない。

手法的にみても、「肉欲の罪人」の放つ sonorous な哀泣、怒号、苦悶のような auditory imagery は、キイツにあっては、visual imagery に変えられ、地獄の carnal sinners の叫びは、寧ろ static な動画にして捉えられている。その単的な一例は、Francesca の姿で、その fair form は永遠の一瞬として描き出されている。さらに注目すべきは、*On a Dream* ではキイツ自身が、その動画の中に入り込み、“fair form” と、暗澹たる闇夜を漂流していることであろう。こうした、理想美の対象と瞬時にして合一し、identification を営む精神作用は、夙に *Endymion* の中で、

The moment have we stept
Into a sort of oneness, and our state
Is like a floating spirit.

(*Endymion*, Book I, 795—797)

「われわれが一如の境地に入るやいなや
われわれの心は漂う魂のごとくなる。」

—『エンディミオン』第一巻、795—797行—

と述べている通りで、「一如の境地」は、すぐれた詩人のみが持つ trait であり、嵐の夜に吹き流される Francesca の “fair form” に、キイツは、超脱した実体と化し、肉体の形骸を離れ、想像の瞬時的悟達作用により同一化する。

これは単なる陶醉や沈潜でなく、思索対象に自己を置換するのでもなく、一種の impersonality <自我脱却>であり、一つの self-salvation <自己救済>の過程であった。

「私は想像力の強まるにつれ、ますます、私がこの世のみならず、無数の世界に生

きているのだと痛感させられる。私が独りになるやいなや、すぐ叙事詩で偉大な人物が私の廻りに群がり、近衛兵にも等しい役割を演じてくれる。そういう状態になると、私は、塹壕の中で叫ぶアキレスと一緒にいるし、またシシリーの谷間にテオクリタスと坐している。あるいは全身全霊、トロイラスと合一して、『吹き送らるるを冥府の岸辺に待つ滅びし魂のごと、われは彷徨う』という詩句を誦しつつ、この上もなく微妙な恍惚の虚空にとけこみ、心満ちたりて独りでいるのだ。」註(21)

第 George 夫妻に宛てたこの Journal Letter の一部は、こうした自己を脱して思索対象と identify する詩人の精神作用を旨く説明している。この、同一化の過程は、*Ode to a Nightingale* で、霊鳥の妙音に聞き惚れているうちに、睿智の直観として働く imagination の力で、詩人が理想美、即ち、霊鳥と同化したあの Metamorphosis の過程を彷彿とさせてくれる。Keats が別の箇所で、「想像が美として捉えたものは、真実でなければなりません」と述べているが、この意味も、かかる詩人の、“the agonies, the strife of human hearts” を痛切に体験した詩人の “impersonality” を知った時に、自ずと明瞭になるであろう。

統一と調和を基調とする、この壮大な『神曲』の狙が、理想美 Beatrice との合体昇華によるダンテの自己救済にあったとすれば、キイツが Scotch Tour で『神曲』の地獄篇から汲み取ったのも、正しく、その精神であったにちがいない。現実界にあって、たえず、一種の “Purgatory blind” <無明の煉獄>に悩んでいた23才の若き詩人キイツにとって、*Divina Commedia* の意図した “self-salvation” は、一つの導標となり、その先詩人の「広大な情緒領域」註(22) は、詩人に新しい視野と洞察を与え、annus mirabilis の奇跡を生み出したのである。

註(1) Maurice B. Forman (ed.): *The Letters of John Keats* (Oxford) 1952, p. 126. 所収

cf. Walter J. Bate: *John Keats* (Harvard University Press) 1963, p. 309.

この Reynolds 宛の *Epistle Verse* は、もともと病気の彼を楽しめます目的で書かれたが、結果は逆効果で、深刻なものになったとある。

註(2) Douglas Bush: *Mythology and the Romantic Tradition in English Poetry* (Pagent Book Company, N. Y.) 1957, p. 81.

註(3) cf. H. W. Garrod: *The Poetical Works of John Keats* (Oxford) 1939, p. 54. *Sleep and Poetry*, 124—125に見られる詩句。

註(4) A Letter to Benjamin Bailey, June 10, 1818.

註(5) Maurice B. Forman: *The Letters of John Keats* (Oxford) 1952, p. 197 脚註参照。Edinburgh Magazine (May, 1818) に載ったもの。

註(6) *The Vision; or Hell, Purgatory, and Paradise of Dante Alighieri* Translated

- by The Rev. Henry Francis Cary, A. M. (London) 1814.
- 註(7) Robert Gittings: *The Mask of Keats* (Heinemann) 1956.
 “Keats's Debt to Dante” (p. 5 ~ p. 44) の一章は見応えがある。但し部分的には問題の点がある。
- 註(8) H. F. Cary: *The Vision; or Hell, Purgatory, and Paradise of Dante Alighieri* (John Taylor) 1831, vol. 1, Preface, pp. 1~2 参照。
- 註(9) Maurice B. Forman: *The Letters of John Keats*. (Oxford) 1952, p. 127.
- 註(10) Ibid., p. 154.
- 註(11) Ibid., p. 163.
- 註(12) Ibid., p. 177.
- 註(13) Ibid., p. 133.
- 註(14) Ibid., p. 139.
- 註(15) C. D. Thorpe: *The Mind of John Keats* (Oxford) 1926, p. 70 参照。
- 註(16) Walter Evert: *Aesthetic and Myth in the Poetry of Keats* (Princeton University Press) 1965, p. 216 参照。
- 註(17) Hyder E. Rollins: *The Letters of John Keats* (Harvard University Press) 1958, vol. I. p. 342.
- 註(18) Ibid., vol. II, p. 91.
- 註(19) Earl R. Wasserman: *The Finer Tone: Keats' Major Poems* (Johns Hopkins University) 1953, p. 220.
- 註(20) H. W. Garrod: *The Poetical Works of John Keats* (Oxford) 1939, p. 471.
- 註(21) M. B. Forman: *The Letters of John Keats* (Oxford) 1952, p. 240.
- 註(22) T. S. Eliot: *Selected Prose*, ed. by John Hayword (Penguin) 1953, p. 100.
 ‘A Talk on Dante’ delivered at the Italian Institute, 4 July, 1950 による。この論文は、T. S. Eliot: *Selected Essays* (Faber & Faber) 1932 の Dante 論とは幾分、内容が異なるようである。
- ※ 本稿中のダンテ訳は「神曲」生田長江訳、新潮社・世界文学全集(昭・4)を参照した。
 他、参考本

1. Herman Hefele: *Dante* (Fromans Verlag) Stuttgart 1923.
2. 「ダンテ」(筑摩書房)世界文学大系、昭和37年。
3. 黒田正利著「ダンテの文学思想」(日本学術振興会) 1929.
4. Bernard Blackstone: *The Consecrated Urn: An Interpretation of Keats in terms of Growth and Form* (Longmans) 1959.
5. Cleanth Brooks: *The Well Wrought Urn: The Studies in the Structure of Poetry* (Dennis Dobson) 1948.
6. Bernice Slote: *Keats and the Dramatic Principle* (Univ. of Nebraska) 1958.
7. Kenneth Muir: *John Keats: A Reassessment* (Liverpool Univ. Press) 1958.
8. C. L. Finney: *The Evolution of Keats' Poetry* (Russel & Russel) 2 vols. 1963.